

森ノ宮遺跡から発掘された人骨

写真1 (上段): 男性の屈葬された人骨

写真2 (下段左): 上顎骨

赤矢印: 両側の犬歯(糸切歯)が抜歯された痕跡(歯が抜かれた部分が隙間となっている)

青矢印: 齲歯(虫歯)になった臼歯

写真3 (下段右): 研磨加工された下顎骨

森ノ宮遺跡の人々 —医学部の古人骨コレクション—

大学の知を発掘!
009

大阪市立大学医学研究科では、遺跡から出土した古人骨約800体を保管・管理している。縄文前期(約7000年前)から近代までのものを網羅しており、収蔵数は日本の大学や博物館の中でも屈指である。これ

らの人骨は、解剖学教室(現・器官構築形態学)を開設した島五郎教授によって収集が始まり、人類学研究のために人骨の所属機関から寄託されたものである。近畿地方と岡山県・徳島県のもので大半を占め、近世の人骨が最も多く約500体、次いで古墳時代の人骨が約100体である。近世の遺跡の場合、文献などから人骨の由来がわかる場合が多い。たとえば¹⁵⁷⁰⁻¹⁵⁸⁰大坂本願寺戦争(石山合戦)や^{1614・1615}大坂の陣の犠牲者、明石城の武士、大坂の豪商、山村や町で生活する庶民や、「子墓」から出土した乳幼児などの人骨がある。これらの古人骨は貴重な資料として、形態学以外にも炭素同位体分析やDNA分析などの分野からも注目されている。

今回は森ノ宮遺跡(大阪府中央区森ノ宮)から出土した人骨を紹介しよう。森ノ宮遺跡は、縄文時代中期(約5500年前)から弥生時代前期の遺跡で、西日本を代表す

る貝塚遺跡として有名である。これまでに、縄文時代後期・晩期の12体、弥生時代3体、時期の特定ができない10体、総数25体の人骨が出土している。

縄文時代後期・晩期のものは屈葬されたもので、うち1体は大学史資料室で展示準備中である(写真1)。また、縄文時代から弥生時代の風習である抜歯が男性骨2体に見られる(写真2)。また、齲歯(虫歯、写真2)や歯槽膿漏などの口腔疾患は、歯が観察できる成人の約半数におよび、口腔内環境が悪かったことが推測される。加齢とともに発症しやすい変形性脊椎症が縄文後期の40代男性と老齢の女性に認められ、とくに老齢女性骨では頸部と腰部の椎骨が著しく変形している。推定身長は縄文時代の男性3体の平均が158cm、女性1体は147cmで、平均的な縄文人の身長である。

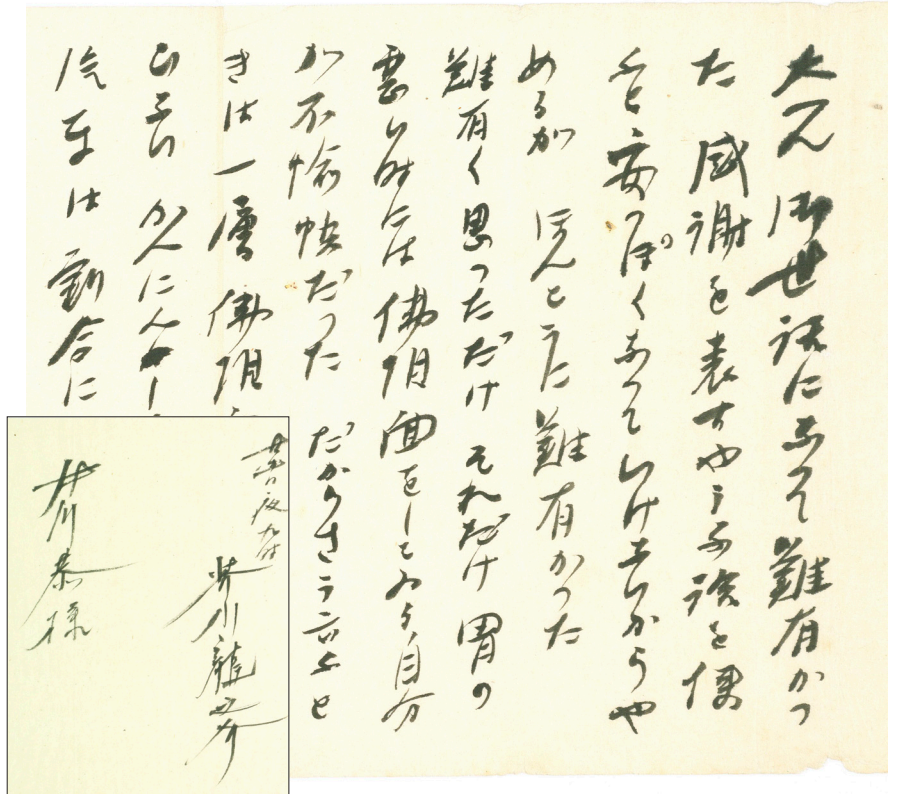
出土人骨のなかに加工された下顎骨がある(写真3)。人骨を加工した例は非常に稀で、とくに下顎骨を加工した例は報告がない。「首飾り」や「腕飾り」という説がある。

人骨が文化財指定されることは稀であるが、これらの森ノ宮遺跡の人骨は2013年に大阪市の指定文化財となっている。(医学研究科 安部みき子)



140周年展と大学史資料館(大学博物館) 実現にむけてご寄附のお願い →大阪市立大学夢基金
お申込み時にTOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室(夢基金担当) TEL06-6605-3415
<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbtf2s>

編集発行
(仮称)大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階 大学史資料室内
TEL: 06-6605-3261



芥川龍之介書簡 — 初代学長・恒藤恭との友情—

大阪市立大学学術情報総合センター内の恒藤記念室は、新制大阪市立大学の初代学長である恒藤恭(旧姓・井川)^{つねとうきょう 1888~1967}に関する諸資料を収蔵する。これは、恒藤家から数次にわたり寄贈・寄託を受けた4000点以上に及ぶ資料群である。日本における法哲学の確立に大きな役割を果たした恒藤は、第一高等学校(現在の東京大学教養課程の前身)^{1892~1927}時代、同級生として芥川龍之介と出会い、生涯を通じてその親友であった。そのため、上記資料群には、芥川が恒藤に送った直筆書簡類(封書・はがき)102点が含まれる。

芥川は生涯にわたり非常に多くの手紙を書いた人物である。恒藤宛て芥川書簡は、「数については小穴隆一や佐佐木茂策に宛てたものの方が多いが、芥川という作家の血肉を伝える点では、それらをも圧して断然に貴重な書簡群であることは言を俟たない」(松本常彦「樹下の神々・井川恭と芥川龍之介」『芥川龍之介の手紙 敬愛する友 恒藤恭へ』山梨県立文学館、2008年)と評される。その内容は、文学・音楽・美術の評価、「鼻」「父」「手巾」などの自作小説の解説、日記の抜粋など多岐にわたる。そして書簡に記された詩歌は短歌、俳句、漢詩、詩など約300点に及び、

この書簡類自体を作品群と捉えることができる、とも指摘される(前掲松本)。書簡のほとんどは『芥川龍之介全集』に翻刻されているが、原資料からは全集に反映されていない詩の推敲跡を確認することができる。

写真右は、恒藤への礼状(冒頭と末尾)である。1915(大正4)年、芥川は家族の反対を受け、吉田弥生への求婚を諦めることとなる。この失恋から約半年後の同年8月、恒藤は傷心の彼を気遣い、自身の郷里・松江に迎える。ひと夏をともに過ごし、各地を案内して歓待、登山や海水浴も楽しんだ。東京に帰った芥川は、松江滞在中の御礼を長文にしたためた。親友と過ごしたこの夏の日々をきっかけに創作意欲を取り戻した芥川は、同年11月には雑誌『帝国文学』に「羅生門」を発表したのである。

この書簡群には文字情報以外にも、自画像と思われるものや、机に向かって人物像(写真左)など、はがきに添えられた絵に芥川のセンスを垣間見られるのも楽しい。なお、この書簡類は恒藤記念室にてデジタルデータを閲覧することができる。(大学史資料室 田中ひとみ)



準備室だより

- ◆来年の140周年展にむけて、文系(大学史・文系資料)・理系(理系資料・古人骨)・展示設計ワーキンググループで、展示計画を固めつつあります。
- ◆大阪市立大学ホームページの創立140周年記念特設サイトに、【「大学史資料館」の設立をめざして】が公開されています。140周年展および大学史資料館の準備状況の報告や、『NEWS LETTER』などを順次掲載していきます。ぜひご覧ください。
- ◆この『NEWS LETTER』は、大阪市立大学学術情報総合センター ホームページの学術機関リポジトリでも公開しています。「大学史資料館」で検索してください。

(仮称)「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター6階 大学史資料室内 TEL: 06-6605-3261